# 第１章

## １８世紀後半のロシアの «публика（公衆）»

17 世紀以降にヨーロッパでは近代的「市民社会」が生まれ、18 世紀に「市民社会」は成長し、「論議する公衆」と「世論」が生まれたとされる[1]。文化史家 P.N.ミリュコフ(1859-1917)は、「ロシアで批判という概念が生まれたのが 18 世紀後半であり、それは世論と深く関わっており、読者層の増加と印刷業の進展の結果生まれた」[2]と主張する。「世論」は«публика（公衆）» の形成と関連しているが、いずれも特権を有する貴族中心であったことはロシアの特徴である。

ロシアで、最初に «public»に相当するロシア語の言葉 «публика»がうまれたのは、官僚体制と軍が形成され、絶対主義国家の様相を示しだしたピョートルⅠ世（1672-1725 在位 1682-1725）の時代である。外来語として «публика»は国家文書などに現れ、最初に出現したのが 形容詞«публичный»という言葉で 1704 年とされている[3]。その後、この言葉は 1720 年の役人の権利と義務を定めた「『総則』では、「全国民的事業（публичные дела）と個人的事業（приватные дела）というように区別され、両方の言葉とも本文の最後に説明がつけられている外国語用語辞典に含まれていた」[4]と記されている。また、I.ノルドステット の編纂による『ドイツ語、フランス語訳付ロシア語辞典』(1782 年）では、 «публика»はロシア語の «общество»,フランス語の «le public»、ドイツ語の «das ganze Volk», «das Publikum» に相当すると記されている[5]。

だが、1783 年に人文系の国立学術機関として、設立されたロシア・アカデミーが編纂した『ロシア・アカデミー辞典』には、言葉 «публика»は記載されていない。しかし、ノルドステットがロシア語に相当すると指摘した言葉 «общество»の定義は、記されている。 «общество» は 2 つの意味を持つ言葉として紹介されている。 1）同じ法律の下に、周知の規則のもとに生きている人々。例文としては「社会の中で生きる。人間は、社会のために生まれる。人間は、社会にとって有益でなければならない。社会によって、敵から守られる」が取り上げられている。 2）人々の階層。同じ方針や同じ物事を中心に集まった多くの人々の集まり。例文として「男性教師協会。商人、工業人、職人の協会」と説明されていて、同じ活動をおこなう社会グループとしての意味が記されている[6]。

この辞典から約 100 年後に出版された V.I.ダーリ（1801-72）の辞典では、 «публика»は、社会、人々を表すラテン語から発生した言葉と説明され、続けて «публика»とは、わが国では下層住民と普通の人々が含まれない社会[7]、つまり特権層の社会であると説明されている。

ここで重要な点は、1770 年代から世紀末にかけて、ロシア社会で意見を積極的に発表し、議論をおこなった«публика»が、具体的にどのような階層の人々によって構成されていたかを考察することである。「«публика»は、上品な、教養ある社会と好まれて表現された」[8]とされるが、18 世紀後半のロシア社会の識字率、教育レベル、農奴制の存在などを考慮し、さらに 1882 年発行のダーリ辞典の説明を考慮すると、«публика（公衆）»は幅広い民衆層を包括するような概念では、決してありえない。

エカテリーナⅡ世は、1769 年に雑誌『一切合切(Всякая всячина)』に「公衆の皆さんへ(Госпоже публике)」[9]という挨拶文を残している。エカテリーナⅡ世は、「あなた方は余りにも新しい物を貪欲に受容している。・・・否定できない真実をあなた方に紹介するが、耳を傾けようとしない者には訓戒は聞き届けられないだろう」と述べ、雑誌の読者に対して«публика（公衆）»という言葉で呼

びかけている。

啓蒙家のノヴィコフは、1769年に刊行した雑誌『働き蜂（Трутень）』(1679-1770）に「отдан на суд публике:итак, благоразумные и беспристрастные читатели сей суд ・・・ окончить могут(公衆に審判を委ねる。つまり、賢明な、公正な読者が・・・審判を終わらせることができる)」[10]の文章を残している。ノヴィコフにとって、公衆とは賢明な、公正な読者である。また、劇作家であり、社会評論家のフォンヴィージンは,『誠実な人々の友、もしくはスタロドゥーム（Друг честных людей, или стародум）』[11]で「私達の啓発された公衆（просвещенная публика）が知っておくにふさわしい教訓的なものがたくさんあります」[12]、「立派な公衆(почтенная публика)を印刷所の側から満足させるように努力します」[13]など、しばしば文章の中で、「公衆」という言葉を使用している。

エカテリーナⅡ世が呼びかけた「公衆」が、ノヴィコフが記した「賢明な読者」が、フォンヴィージンが意味した「啓発された公衆や立派な公衆」が具体的にどんな人々であったかを特定することによって、「公衆」となりえた階層がより明確になる。ロシア古典主義の代表的作家 A.P.スマローコフ（1717-77）が、悲劇『僭称者ドミートリー』の序文の中で、「 言葉«публика» は、ヴォルテールがどこかで記していたように、社会全体を意味するのではなくて、社会の小さな一部分、つまり趣味と知識ある豊かな人々を意味する」[14]と説明している。どんな階層が公衆だったのかを明らかにするために、書物や定期刊行物の読者層について分析をおこなうことにする。

## 1.1. 国民の階層構成から見る貴族

ソビエト時代の人口動態学者 B.M.カブザンは、18 世紀におこなわれた人頭税徴収の際に使用された人口調査資料をもとにロシアの人口動態を分析し、下記の資料を発表している[15]。

表1　ロシアの人口（人頭税徴収の際の人口調査資料をもとにして）

| 第1回人口調査<br>1719年 | 第2回人口調査<br>1745年 | 第3回人口調査<br>1763年 | 第4回人口調査<br>1782年 | 第5回人口調査<br>1795年 |
|---|---|---|---|---|
| 1,570万人 | 1,830 万人 | 2,140万人 | 2,610万人 | 3,750万人 |

表2　18世紀ロシアの国民の階層構成％（単位：百万、男性・女性も含む）[16]

| | 1795年 | |
|---|---|---|
| | 人数 | ％ |
| 担税民 | 32.6 | 89.8 |
| (そのうち農民) | | |
| 私領地農民 | 19.6 | 53.9 |
| 御料地農民 | 1.0 | 2.9 |
| 教会地農民 | 2.9 | 8.1 |
| 国有地農民 | 9.1 | 25.0 |
| 都市住民層 | 1.6 | 4.2 |
| 非担税民 (貴族、聖職者、官僚、軍人など) | 2.2 | 6.0 (貴族 0.7%) |
| 合計 | 36.4 | 100.0 |

第2表が示すように、1795年の第5回調査の数字を見ると、農民が約90％を占め、都市住民が約4％で、貴族、聖職者、官僚と軍人などが占める割合が約6％で、このうち貴族の占める割合は1％にも達していない。

18世紀は、貴族をめぐる状況が大きく変化した時代である。ピョートルⅠ世はロシアの西欧化をめざして行政、軍事、経済、文化分野などで一連の国内改革を行い、全ての貴族に軍隊、または官庁での終身勤務を強要し、貴族の国家勤務の義務化をはかった。ピョートルⅠ世が1722年に採用した『官等表』は、貴族の国家勤務の定着を促進し、ロシアにおける官僚制度の基礎を築いた。

しかし、貴族はこの国家勤務の義務化に反発を示し、貴族の義務的国家勤務はピョートルⅠ世の後僅かずつではあるが緩和されることになる。1762年にはピョートルⅢ世(1728-62 在位1761-62)により、「貴族の自由についての布告」が公布されたことで、貴族の軍事勤務と国家勤務の義務は撤廃され、勤務の自由が原則となる。その後、エカテリーナⅡ世により1775年には地方行政改革がおこなわれ、エカテリーナⅡ世の政治・文化・経済政策を執行し、地方行政をつかさどる貴族官僚が形成される。そして、1785年には「貴族と都市への恵与状」が交付され、国家の支配階級としての貴族の特権は法律によって整備され、貴族には農民と土地を所有できる独占権が与えられることになる。貴族は全ての税金と義務から免除され、経済的にも政治的にも支配階級となり、文化エリートを構成することになった。

だが、国家勤務の義務から解放された後も、多くの貴族は国家勤務を続けている。貴族にとっては出世が一番重要な社会的関心事であったからであり、国家勤務は貴族に皇帝権力に関与しているとの感覚を与え、国家の支配階級に属し国家官僚として活躍し、社会的役割を演じることが自己実現の感覚をもたらしたからである。さらに、貴族にとっては、国家勤務が官等制度を通じて貴族社会の一員として認められる方法でもあったからである。それ故に、ロシアの貴族は子弟の教育問題

に強い関心を示し、教育問題はエカテリーナⅡ世による啓蒙政策において重要な鍵を握ることとなる。

## 1.2. 書籍文化の発展、識字率と読者層

文化史家のミリュコフが,「出版は、社会と文化の傾向を示す極めて敏感なバロメータである」[17]と指摘したように、出版活動はその社会の知的活動の発達レベルを示す指標である。ロシアでは、18 世紀に宗教関係書、新聞、雑誌を除いて約 9500 点の書籍が出版されている。その 25 年間ごとの書籍出版点数の推移は、下記の表のようになる。

**表 3　25 年間隔のロシア語書籍出版点数（1698 年～1800 年）**[18]

| | |
|---|---|
| 1698 年～1724 年 | 561 |
| 1725 年～1750 年 | 357 |
| 1751 年～1775 年 | 2,010 |
| 1776 年～1800 年 | 6,585 |
| 全体 | 9,513 |

第 3 表が示すように、1750 年代を境に急激に出版点数が増えている。これは官営の印刷所が次々と設立されたことが大きな要因であり、啓蒙活動がより拡大し、読者層が増えたことに関連している。また、最後の 25 年間がその前の 1751 年から 1775 年までの 25 年間と比較して 3 倍に出版点数が増えている最大の理由は、1783 年に条件付きながらも民営印刷所の設立がエカテリーナⅡ世によって認可されたからである。

また、『18 世紀世俗文字によるロシア語書籍総目録 1725-1800』（全 6 巻）[19]を基礎に作成した 5 年間ごとの書籍作品点数は、下記のようになる。

**表 4　5 年間隔のロシア語書籍出版点数　（1756 年～1800 年）**[20]

| | 出版書籍作品数 | 各 5 年の平均 | 常用正字法で書かれた作品 | 旧正字法で書かれた作品 |
|---|---|---|---|---|
| 1756 年～1760 年 | 262 | 52.4 | 193 | 69 |
| 1761 年～1765 年 | 805 | 161.0 | 631 | 174 |
| 1766 年～1770 年 | 767 | 153.4 | 701 | 66 |
| 1771 年～1775 年 | 958 | 191.6 | 897 | 61 |
| 1776 年～1780 年 | 1,198 | 240.0 | 1,087 | 111 |
| 1781 年～1785 年 | 1,315 | 263.0 | 1,220 | 95 |
| 1786 年～1790 年 | 1,936 | 387.0 | 1,852 | 84 |
| 1791 年～1795 年 | 1,865 | 373.0 | 1,761 | 104 |
| 1796 年～1800 年 | 1,531 | 306.0 | 1,422 | 109 |
| 合計 | 10,637 | 212.74 | 9,764 | 873 |

ただし、5年間隔の書籍出版点数の推移を示した第4表には宗教関係書、新聞、雑誌も含まれている。したがって、25年間隔と5年間隔の出版点数に関する第3表と第4表の間に数字の違いが見られる。だが、これらの2つの表はいずれにしても、ロシアにおいて書籍出版点数が18世紀末になるにつれて大きく増加していることを示している。それは、ロシアで出版活動が18世紀のエカテリーナⅡ世の治世に啓蒙政策の一環として積極的におこなわれていた証左である。

さらに、ロシアの新規刊行雑誌のタイトル数も1751年～1760年にかけては5点だったのが、1771年～1780年にかけては18点、1781年～1790年にかけては29点と確実に増えている[21]。書籍商の数も1770年代にはモスクワとサンクト・ペテルブルグで15軒だったのが、1790年代には50軒以上に増えていて、同様の数の書店が地方にもあったとされる[22]。また、貴族の私設の図書室と平行して科学アカデミーの図書館やモスクワ大学の図書館などの官立図書館も1780年代初頭にかけて15館に増えている。民間の読書協会や書店の中に有料の読書室などが次々と創設されたことなどは、読者人口と読書のできる環境が、書籍数が増えると同時に整備されたことを示している。

しかも、書籍は首都のモスクワやサンクト・ペテルブルグだけでなく、地方にも普及している。エカテリーナⅡ世がおこなった1775年の地方行政改革は、書籍の地方への普及に大きな役割を果たした。地方改革の結果、貴族を含めて地方に住む国家官僚の数が飛躍的に増え、地方への文化の普及がもたらされた。そして、地方に住む教養人も雑誌の予約購読などを通じて、首都と同じように知的生活を送れる機会を得ることになった。

書誌学者サマーリンは、18世紀の読者層の問題をアルヒーフに残された書誌データを基礎に統計学調査をおこない、雑誌と書籍の予約購読者リストを分析した研究書『18世紀後半のロシアにおける読者』を2000年に発表した。サマーリンは、18世紀後半ロシアでは印刷出版業の発展と共に書籍販売業が急速に発展し、予約購読の形で書籍や雑誌を購入するという方法が採用されるようになったと記している。

サマーリンは、1762年から1800年までに出版された67の非定期出版物や22の雑誌に掲載された100タイトルの予約購読者リスト13,567例をもとにして、予約購読者と読者の社会層について統計数学的調査をおこなっている。彼は「1762年から1800年まで約7,000タイトルの民間書籍が出版されている。私が使用した予約購読者リストは、その期間に刊行された出版タイトルの約1％にあたる購入者データにすぎない」とし、さらに「このような少ない数字では、社会学的調査を実施するのには十分でないかもしれないが、少なくとも、出版物の読者の社会構成に関して得られるデータから、読者の主要な傾向を読み取ることができる」[23]と述べ、自らのデータ数が少ないことを認めている。しかし、アルヒーフに保存されている18世紀の書誌データを基礎に、購読者の傾向分析に関する極めて貴重な先行研究である。予約購読者リストには購読者氏名、官等、及び職責に関するデータ、住所、注文点数、紙の種類などが記されていた。これらのデータを基礎にして読者の身分構成、書籍の普及地域、読者に占める女性の割合など、詳細な分析がおこなわれている。

この分析結果の中に、どの地域に住んでいる読者が出版物の予約購読をおこなっているかの調査データがある。

表5　予約購読者の地域別構成[24]

| 地域名 | 予約購読者数 | % |
|---|---|---|
| モスクワ | 5,642 | 41.59% |
| サンクト・ペテルブルグ | 3,951 | 29.12% |
| 中央ロシア | 1,559 | 11.49% |
| 沿ヴォルガ、ヴォルガ・ヴャトカ地域 | 835 | 6.15% |
| ロシア極北地方 | 580 | 4.28% |
| ウクライナ | 454 | 3.35% |
| バルト海地域とサンクト・ペテルブルグ県 | 142 | 1.05% |
| ウラル | 123 | 0.91% |
| シベリア | 101 | 0.75% |
| ロシア南部 | 87 | 0.64% |
| ベラルーシ | 61 | 0.45% |
| カフカス | 13 | 0.09% |
| 海外 | 9 | 0.06% |
| 不明 | 10 | 0.07% |
| 総計 | 13,567 | 100.00% |

第5表が示すように、モスクワとサンクト・ペテルブルグの両首都を除いて、一番多くの予約購読者が居住していたのは、115の都市を抱えていた中央ロシア（ヴラジーミル県、ヴォロネジ県、カルーガ県、クールスク県など）で、約11.5%の予約購読者が住んでいる。ロシア帝国の約400の地方都市で、すでに雑誌や書籍の予約購読がおこなわれていたことが明らかになった。この時期、書籍販売網がまだ創生されたばかりの段階にあっても、表から明らかなように予約購読の読者は確実にシベリアやカフカス地方まで幅広く地方に拡散していたし、両首都を除いて地方の読者が30%を占めていた[25]。

18世紀後半、印刷業と書籍販売ネットワークはまだ地方では組織され始めた段階であったが、ロシア帝国の広範な地域に書籍が流通していたことをこの表は示している。ロシア農学の創始者で、回想録を著したA.T.ボロトフ(1738-1833)はトゥーラ県に住んでいたが、1791年の出来事として「夏、私は息子と共に時間があると毎週郵便で届けられる書籍と様々な雑誌を読みました。書籍と雑誌は私達に非常な満足を与えてくれ、私は書籍などにはお金を惜しまず、予約購読できるものは全て予約しました。とくに、私達を喜ばせたのは届くのが待ち望まれたカラムジンの『モスクワ・ジャーナル』[26]です」[27]と書き記している。これは、地方に住む読者層も、書籍や雑誌を通じて、確実に新しい文学作品と共に政治・社会問題に触れていたことを示している。

また、書籍の普及に大きく関与しているのが、識字率の問題である。ロシアの識字率に関しては、サプノフが1982年に記した論文「ロシアの読者の歴史」で考察している。「最初のロシアの識字率に関する信用できるデータが出たのは、18世紀後半である。それは、エカテリーナⅡ世の『啓蒙専制主義』が最も花開いた時代であり、ロシア社会の文化レベルを反映している。18世紀後半の識字率は約4%である」[28]と記している。ロシア社会における潜在的読者数は、この識字率から判断す

ると、極めて少なかったと判断しなければならない。

ロシアの出版印刷業の進展に関連して、1985年に論文「ロシアにおける書籍・雑誌出版の発展ファクターとしての教養層の増加」が発表されている。著者のセヴァスチヤノフは、1760年代からロシアにおいて書籍出版活動が急激に発展した理由を、教育制度の確立と教育を受けた人数の増加に関連づけて説明している。彼は、1730年から1800年までの科学アカデミー、芸術アカデミー、モスクワ大学、神学校、連隊付属学校など492の教育機関の卒業生に関するデータを基に、読み書きができた人は少なくとも317,000人がいたと計算している。そのうち12,500人ほどの貴族階級と34,000人の非貴族階級が比較的高い教育をうけた潜在的読者とみなしている。だが、実際の出版文化の質と書物の需要を作り出していた積極的な読者層は、貴族階級においてはさらにその4分の1、非貴族階級においては6分の1にすぎないと結論づけている[29]。この結論からすると、積極的読者数は約10,000人ほどになり、彼が後に出している読者数の数字と大きく異なってはいない。

この論文によると、ロシアの潜在的読者層は教育機関による教育・啓蒙活動の結果として生まれ、また識字層が急激に増加したことが、出版文化が18世紀末にかけて大きく進展した理由であると説明している。とくに、非貴族階級の一般読者数の増加は、出版印刷物の内容の変化に大きく関係していると結論付けている[30]。

印刷された書物の大部分は、政府の官報や学校の教科書や宗教関連書で、書籍のうち40%がいわゆる世俗書であり、大半を占めたが外国の娯楽翻訳小説だった。ロシアの出版印刷業は、積極的に一般読者向けの世俗図書を印刷した。例えば、ノヴィコフは雑誌『画家 (Живописец)』[31]に、「これまでロシアでは興味深く有益な書物は、ほとんど発行されたことがない。今日では多くの良書がロシア語に翻訳されている。しかし、ロシアの読者は、興味本位のロマンチックな小説の方を相変わらず読みたがっている」[32]と述べ、ロシアの読者がロシア語で書かれた作品に注目しないで、娯楽作品を好む状況に不満を表現している。このような背景のもと、出版にかかわる貴族文化人にとっては、ロシア語によりロシアの作家の作品を出版することが重要な課題となった。

セヴァスチヤノフは、積極的読者数についても分析し、1750年代から1760年代にかけて発行された雑誌『毎月の作品 (Ежемесячные сочинения к пользе и увеселению служащих)』[33]とノヴィコフが発行した雑誌『雄蜂 (Трутень)』[34]の印刷部数を基に、積極的読者数を約1,200人とはじき出した。そして、カラムジンが新聞『モスクワ報知 (Московские ведомости)』[35]の印刷部数が1780年から1800年までに600部から6,000部に増加したことを記していることを根拠にして、読者数が10倍に増えたとし、この1,200人を10倍して、1790年代の終わりにかけてロシアには積極的読者層が12,000人から13,000人ほどいたと推測し、その数字を具体的に引用している[36]。

しかし、文化史家のロートマンは、「18世紀には印刷部数は、商業的要素ではなく、権威的要素として見られていた。印刷部数を記すことによって、作家や発行者は、しばしば読者層をつくりだす文化的任務を負っていたため、印刷部数はこのぐらいの読者数がいてしかるべきという数字である」[37]と指摘している。このように、ロートマンは、印刷部数は現実に売れた数字ではない可能性があり、印刷部数をもとに積極的読者数を出すことの危険性を主張した。

そこで、上記に述べたサマーリンの予約購読者のデータベースを利用した読者層の分析が、より客観的な事実を伝えることとなる。サマーリンは予約購読者の階層分析をおこなうにあたって、ピョートルⅠ世の治世時に採用された官等表を基礎においている。

官等表は1722年1月24日にピョートルⅠ世によって採用されたもので、全ての官僚ポストが3部門(武官、文官、宮内官)の14のランクに分けられ、昇進のコースを明示したもので、昇進の基準

は功績と年功であることを示している。官等表に記載されているポストに就いた全ての官僚は貴族となれ、14等で一代貴族、文官は8等（武官では12等）で世襲貴族となれた。1856年12月の法律で基準が変更され、9等で一代貴族、文官は4等官(武官では6等官)から世襲貴族となれるように改正されている。官等表は非貴族階級出身者に昇進する道を開き、官僚にとっては勤務に対する出世奨励策の役目を果たした[38]。このシステムの導入により、貴族文化人となった非貴族階級出身者が出現するようになったことは、貴族文化の隆盛の重要な構成要件となっている。

**表6　書籍と雑誌の予約購読者の階層構成の変化　（1762年～1800年）**[39]

| 予約購読者グループ | 1762-1780年 | | 1781-1790年 | | 1791-1800年 | | 1762-1800年 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| 皇帝の家族（エカテリーナⅡ世、パーヴェルⅠ世、大公、大公妃など） | 9 | 0.19 | 2 | 0.19 | 8 | 0.14 | 19 | 0.14 |
| 公爵、伯爵、男爵の称号所有者 | 416 | 9 | 256 | 7.85 | 449 | 7.9 | 1,121 | 8.26 |
| 官等表の等級Ⅰ～Ⅱ | 45 | 0.97 | 45 | 1.38 | 46 | 0.81 | 136 | 1.00 |
| 官等表の等級Ⅲ～Ⅳ | 324 | 7.01 | 245 | 7.51 | 402 | 7.08 | 971 | 7.16 |
| 官等表の等級Ⅴ | 261 | 5.64 | 190 | 5.83 | 349 | 6.14 | 800 | 5.9 |
| 官等表の等級Ⅵ～Ⅷ | 1,044 | 22.58 | 1,145 | 35.1 | 1,696 | 29.86 | 3,885 | 28.64 |
| 官等表の等級Ⅸ～XIV | 835 | 18.06 | 569 | 17.45 | 1,209 | 21.28 | 2,613 | 19.26 |
| 商人 | 305 | 6.6 | 217 | 6.65 | 439 | 7.73 | 961 | 7.09 |
| 町人 | 27 | 0.58 | 10 | 0.31 | 27 | 0.48 | 64 | 0.47 |
| 雑階級知識人（教師、医師、大学生、俳優、官位をもたない下級官僚など　） | 168 | 3.63 | 64 | 1.96 | 237 | 4.17 | 469 | 3.46 |
| 下級軍人 | 21 | 0.45 | 47 | 1.44 | 15 | 0.26 | 83 | 0.61 |
| 農民と召使 | 5 | 0.11 | 8 | 0.25 | 27 | 0.48 | 40 | 0.29 |
| 聖職者 | | | | | | | | |
| 府主教、大主教、主教 | 109 | 2.36 | 58 | 1.78 | 20 | 0.35 | 187 | 1.38 |
| 大修道院長、修道院長 | 158 | 3.42 | 48 | 1.47 | 28 | 0.49 | 234 | 1.72 |
| 長司祭、司祭 | 195 | 4.22 | 51 | 1.56 | 62 | 1.09 | 308 | 2.27 |
| 輔祭 | 20 | 0.43 | 5 | 0.15 | 8 | 0.14 | 33 | 0.25 |
| 修道司祭と修道士 | 42 | 0.91 | 15 | 0.46 | 3 | 0.05 | 60 | 0.44 |
| 神学校生徒 | 8 | 0.17 | 1 | 0.03 | 1 | 0.02 | 10 | 0.07 |
| 社会身分の記載なし | 398 | 8.61 | 213 | 6.53 | 425 | 7.48 | 1,036 | 7.64 |
| 身分不明者 | 39 | 0.84 | 20 | 0.61 | 168 | 2.96 | 227 | 1.67 |
| 組織団体としての講読者 | 195 | 4.22 | 53 | 1.62 | 62 | 1.09 | 310 | 2.28 |
| 合計 | 4,624 | 100 | 3,262 | 100 | 5,681 | 100 | 13,567 | 100 |

1762年から1800年までの読者の社会層について10年毎の変化を観察すると、各階層とも大きな変化はない。しかし、官等表の第6等から第8等の貴族階層の予約購読者数が、一番多くの割合を占めていることが明らかとなった。また、官等表の第9等から第14等の貴族階層と商人階層、雑階級知識人、及び農民層が増加傾向にある。一方で、聖職者層が世俗書籍を講読する割合が減少していることも特徴である。

第6表の1762年～1800年までの項目を分析すると、8.4%が皇帝一族を含めた称号をもつ上流貴族であり、官等表の第1 等から第4等までの貴族層が8.16%、第5等貴族層が5.9%、第6等から第8等までの貴族層が28.64%で、51%以上をいわゆる世襲貴族が占めていることが明らかになった。さらに、表が示すように官等表の9等官から14等官までの軍事部門で世襲貴族の称号を、民間部門で一代貴族の称号をうけた階層までも含めると、いわゆる貴族階層が出版物の予約購読者の70%を占めている。

「1770年代中頃の国民学校の先生の給料は年間100ルーブル、宗教セミナリアの校長の給料は150ルーブルであるのに対して、上流貴族N.I.パーニン伯爵（1718-83）は土地と農奴、かつ年金を5000ルーブル受領していた」[40]や「ノヴィコフの雑誌『雄蜂』の年間の価格が4ルーブルであっても、積極的な読者層を形成していた豊かな貴族層には負担となる金額ではなかった」[41]との説明があるように、18世紀後半において積極的読者層を形成していたのは、経済的にも書籍を購入する余裕があった貴族層であったことが明確になった。

このように、「貴族が新しいヨーロッパ文化の創設者であるばかりでなく、その主要な消費者であることが確認された」[42]とサマーリンは、結論を出している。また、その他の階層について見ると、商人層が7.09%、聖職者層が6.13%、雑階級知識人層が3.46%、下級軍人層が0.61%、農民層が0.29%となっており、18世紀の後半には非貴族階級の読者層が形成されていたことが確認された。

さらに、分析に利用したリストのうち、8,300人の個人名と310の組織機関の名前が特定されており、227人分の個人名は特定されていない。しかし、この227人も積極的な読者層としてみなすことができ、その数は約8,500人いたと推測される。多くの書籍と雑誌の予約購読をおこなった購読者に政治家、軍人、作家、学者など、ロシア文化の担い手の名前を見つけ出すことができる。歴史学者のN.N.バントィシ＝カメンスキー伯爵（1737-1814）（23回）、科学アカデミー総裁K.G.ラズモフスキー伯爵（1728-1803）（23回）、P.V.シェレメーイチェフ伯爵（1713-88）（17回）、詩人G.R.デルジャーヴィン(1743-1816)（16回）、モスクワ大学創設者I.I.シュヴァーロフ（1727-97）（12回）、政治家A.R.ヴォロンツォフ（1741-1805）（11回）、歴史家A.I.ムーシン＝プーシキン伯爵（1744-1817）（11回）、ニージヌィ・ノヴゴロド主教ダマスキン（10回）、出版者I.G.ラフマニノフ（10回）、科学アカデミー院長V.G.オルロフ（1743-1831）（10回）、出版者N.S.スマローコフ（10回）、政治家P.I.パーニン伯爵（1721-89）（9回）、モスクワ大主教プラトン（1737-1812）（9回）、モスクワ大学理事、詩人M.M.ヘラスコフ（1733-1807）（9回）、書籍商グラズノフ兄弟（8回）、作家ボロトフ（8回）、啓蒙家ノヴィコフ（8回）、I.V.ロプヒン伯爵（1756-1816）（7回）、建築家V.I.バジェノフ（1737-99）（6回）、A.A.ベスボロトコ公爵（1747-99）（6回）、歴史家M.M.シチェルバートフ（1733-90）（6回）などである。

そして、このリストにはエカテリーナⅡ世、女流作家E.V.ヘラスコヴァ（1737-1809）、科学アカデミー院長で、ロシア・アカデミー総裁 E.R.ダーシコヴァ(1743-1810)など、女性の予約購読者も多く現れている。もちろん、13567例の中の644例(約0.05%)であるので、女性の購読者の占める割合は全体から見れば、極めて小さい。しかし、「18世紀末には、女性の蔵書と言う全く新しい概

念が誕生した。・・・18 世紀末から 19 世紀初頭の女性の家庭蔵書が、1812 年やデカブリスト時代の人々の相貌を決定した」[43]とロートマンが指摘しているように、女性の識字能力が高まったことが、女性の文化的役割を高めたと言える。

第 7 表が示すように、女性購読者のうち 73.4%が世襲貴族出身であり、一代貴族出身の女性まで含めると貴族出身者は 82%になる。第 8 表によると、このうちモスクワとサンクト・ペテルブルグに在住している女性が 87%以上になり、その他の女性購読者が 46 の地方都市に住んでいることが明らかになった。18 世紀後半では、貴族階級の女性が積極的に読書をおこない、読者層の一部を確実に占めていたといえよう。

**表 7　女性予約購読者の階層構成**[44]

| 予約購読者グループ | 予約購読者数 | % |
|---|---|---|
| 皇帝の家族 | 15 | 2.3 |
| 称号所有者 | 146 | 22.0 |
| 官等表の等級Ⅰ～Ⅱ | 16 | 12.4 |
| 官等表の等級Ⅲ～Ⅳ | 72 | 10.8 |
| 官等表の等級Ⅴ | 82 | 12.3 |
| 官等表の等級Ⅵ～Ⅷ | 157 | 23.6 |
| 官等表の等級Ⅸ～XIV | 57 | 8.6 |
| 商人 | 4 | 0.6 |
| 町人 | 3 | 0.4 |
| 聖職者 | 2 | 0.3 |
| 雑階級知識人 | 2 | 0.3 |
| 社会身分の記載なし | 109 | 16.4 |
| 合計 | 665 | 100.0 |

**表 8　女性購読者の居住地**[45]

| 書籍頒布地区 | サンクト・ペテルブルグ | | モスクワ | | 地方 | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 予約購読者数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| 48 | 176 | 26.5 | 404 | 60.7 | 85 | 12.8 | 665 | 100 |

また、この予約購読者リストには上記に挙げた人達と比べて、予約購読の回数は少ないにしても 18 世紀末にかけて活躍した文化人の名前を見つけることができる。 例えば、作家 I.F.ボグダノーヴィチ(1743-1803)、モスクワ大学法律学教授 S.E.デスニツキー（1740-89）、作家カラムジン、劇作家 Ya.B.クニャジニン(1740-91)、宮内官 G.V.コジツキー（1724-75）、作家 V.A.リョーフシン(1746-1826)、歴史学者 G.F.ミュラー(1705-83)、書籍商 V.S.ソピコフ（1765-1818）、モスクワ大学歴史学教授 Kh.A.チェボタリョフ(1745-1815)、彫刻家 F.I.シューヴィン(1740-1805)、パーニン伯爵、フォンヴィージンなどである。これは、当時予約購読によって書籍・雑誌を購入することが、

ロシアの知的エリートの間に広く普及していたことを物語っている[46]。

また、書籍・雑誌を予約購読購入した組織機関を分析すると、全部で310回にわたって組織が予約購読者となっており、211の組織が予約購読をおこなったことが明確になっている。

表9　予約購読組織[47]

| 組織名 | 数 | % |
|---|---|---|
| 宗教関連学術機関(Духовные учебные заведения)[48] | 35 | 16.58 |
| 裁判機関(Судебные учреждения)[49] | 34 | 16.11 |
| 県所在の国家管理機関 (Провинциальные органы государственного управления)[50] | 26 | 12.32 |
| 修道院・教会(Монастыря и церкви) | 22 | 10.42 |
| 一般学術機関(Светские учебные заведения)[51] | 21 | 9.95 |
| 両首都にある国家機関(Государственные учреждения Москвы и Санкт-Петербурга) | 21 | 9.95 |
| 郵便機関(Почтамты и почтовые конторы) | 13 | 6.16 |
| 貴族団体(Сословные дворянские объединения)[52] | 10 | 4.74 |
| 社会保護機関(Учреждения общественного призрения)[53] | 6 | 2.84 |
| 中央・地方教会管理機関(Учреждения центрального и местного церковного управления)[54] | 5 | 2.37 |
| 学術機関・団体(Научные учреждения и общества)[55] | 5 | 2.37 |
| 産業工場管理機関[56] (Учреждения, управляющие промышленными предприятиями) | 5 | 2.37 |
| 都市住民団体(Сословные объединения горожан)[57] | 4 | 1.90 |
| 宮廷図書館(Придворные библиотеки) | 3 | 1.42 |
| 軍連隊(Воинский полк) | 1 | 0.50 |
| 合計 | 211 | 100.00 |

予約購読した組織を分析してみると、18世紀後半の文化生活に対していかなる組織が書籍に興味を持って、参加していたかを解明できる。第9表が示しているように、宗教関連組織が全体の27%を占めている。これは宗教組織が18世紀後半においてロシアの文化生活に、とくに書籍の発行に関心を抱いていたことを示している。また、裁判機関、地方行政機関、学術機関、郵便機関などが定期刊行物や書籍の予約購読をしているのも、出版統制における当該機関の役割を考慮すると、説明がつく。

エカテリーナⅡ世が、実際の発行者であった雑誌『一切合切（Всякая всячина）』[58]から始まって、ノヴィコフが編集・発行した雑誌『雄蜂』、『画家』、さらに科学アカデミーが発行した雑誌『ロシア語愛好者の友』、カラムジンが発行した雑誌『モスクワ・ジャーナル』まで、18世紀後半のロシアでは雑誌の予約購読制度が広く普及するようになっていた。そして、芸術作品，学術作品、及び宗教作品などを出版するために作家、翻訳家、宗教関係者、書籍販売業者などが、印刷所を中心

に集まるようになった。

貴族の書簡を基礎に心理面に着目した研究をおこなった現代の歴史学者 E.N.マラシノヴァは、ロシア文化の発展における予約購読による雑誌の普及の役割について、次のような意見を述べている[59]。「貴族の文学は、宮廷の注文を受けて書いたような絶対主義のドクトリンの代弁者でなくなり、専制権力の成果を褒め称えることをやめて、独自の『賢明なる読者』と『関心を寄せる読者』を獲得し、独自の立場を明確にさせることになった。言葉の持つ影響力を信じ、専制政府からの知的独立を獲得した貴族エリートは、社会の思想的な指導をすることになった」と強調し、貴族エリートが世論の先頭に立ったことを説明している。具体例として、ノヴィコフとエカテリーナⅡ世との間の『雄蜂』の紙面での討論、フォンヴィージンの『必要不可欠な国家の法律についての考察（Рассуждение о непременных государственных законах）』[60]などの作品を取り挙げている。

また、ロートマンは、「18 世紀の文学は早くから宮廷への依存から脱却して、独自の社会勢力になろうと努力していた」とし、さらに「文学の自らの社会的役割を求める闘いは、社会的独立の権利を求める闘いであり、文学が真実の声であり、宮廷の意見の代弁者でないことを求める闘いであった」[61]と述べている。

つまり、文学が公の国家事業ではなくなり、藤沼貴が述べる「個人的発話」[62]に向かう文学が始まったことを示している。そして、それは具体的にジャーナリズムの出現と進展に繋がっている。こうして、文化人は積極的に世論形成の提唱者となり、ロシア社会において読者層は文化人を核として徐々にではあるが、確実に成長し続けた。

このように、予約購読者のデータを具体的に分析することによって、当時の読者層の特徴と時代の文化の特徴を考察できる。

読者層の分析と同様に、雑誌の著者を分析することも肝要であると考える。読者層の大部分を占めていたのが貴族であり、彼らは官吏でもあり、文筆家としても活躍していた。この事実を確認するために 1783 年に発行され、エカテリーナⅡ世が非公式に編集に参加していた雑誌『ロシア語愛好者の友（Собеседник любителей российского слова）』を取り上げて考察する。一誌のみでは分析するには不十分であるかもしれないが、この時代の傾向は読み取れると考える。この雑誌を取り上げる理由は、第一に、社会・文学評論家の N.A.ドブロリューボフ(1836-61)を初めとして詳細な雑誌の分析がされていて、かなり作品の著者が特定されているからである。第二に、この雑誌はエカテリーナⅡ世が世論の方向づけを目的に、雑誌の編集に直接参加していたとされるために権力寄りの作品が多いと考えられているが、当時の優れた作家がほぼ参加しているからである。第三に、雑誌が民営印刷所設立に関する勅令が出され、制限付きながらも出版の自由がロシアで最初に認められた 1783 年に発行されているからである。

この雑誌の傾向と作家の傾向を分析するために、筆者は各号の名前が特定されている作家を作品の多い順、作品ジャンル別に付属資料 1 の表を作成した。また、雑誌『ロシア語愛好者の友』に参加し、名前が特定されている作家の経歴をこれまでに発表されている資料を基に、付属資料 2 として作成した[63]。

付属資料 1 から、発行部数が 1783 年の第 1 号の 1812 部から 1784 年の最後の号では 800 部にまで減少し、しかも価格も 1 ルーブルから 50 カペイカと半額にまで下がっていることが明らかである。つまり、この雑誌の売れ行きが次第に悪くなったことを示している。また、この時期の雑誌の発行平均年数がほぼ 1 年というのが全ての雑誌に見られた共通の特徴であったが、この雑誌は発行年数が 2 年で比較的長く発行されたと言える。理由は、表の作品数からもわかるように、エカテリ

ーナⅡ世を筆頭にして、ボグダノーヴィチ、ダーシコヴァ、デルジャーヴィン、クニャジニン、フォンヴィージン、リョーフシン、ヘラスコフなど著名な文筆家がほとんどこの雑誌に参加していたからである。

表の作成、著者分析の過程で、これまでに名前が特定されている 30 人の文筆家の多くが上流貴族から下層貴族まで含めて貴族出身者が多いことが明らかになった。これはこの時期すでにロシア社会において、貴族文化人グループが定期出版物の雑誌を中心にして形成されていたことを間接的に示すものと考えられる。

また、著者の経歴を調べた結果、18 世紀末の読者層の特徴にみられたと同じ傾向を見出すことができた。「読者層」に貴族出身者だけでなく、商人や雑階級出身者が現れたことが明らかになったが、同じように作品を提供する側の作家の方にも、P.P.イコソフ(1760-1811)、E.I.コストロフ(1755-96)、S.S.ボブロフ(1763-1810)、P.A.プラーヴィリシチコフ（1760-1812）、F.Ya.コゼリスキー(1734-99)など雑階級出身者、下位聖職者、及び商人出身者が現れている。

さらに、エカテリーナⅡ世、ダーシコヴァ公爵夫人、詩人 M.V.スシコヴァ(1752-1803)などが、女性作家として雑誌に参加しており、「読者層」で観察された女性の進出を同様に文筆家にも見ることができる。

18 世紀後半の「読者層」を分析する時に忘れてはならないことは、1760 年代以降、それまでは国家の独占事業であった出版分野に個人の出版業者や書籍商が現れたことである。とくに、1783 年の私営印刷所の設立を認めたエカテリーナⅡ世の勅令は、出版文化の発展に極めて大きな貢献を果たした。

ロシア社会においても読者層は教育の普及と共に確実に増加したが、主要な読者層である「公衆」を形成していたのは、趣味と知識のある豊かな人々、貴族階級であったことが明らかになった。そして、「読者層」として、商人、町人、及び雑階級人などが 18 世紀後半にはすでに現れている。

## 1.3. 貴族文化人

### 1.3.1. 定義

インテリゲンツィヤ(知識人)の意味が紹介されたのは、1882 年に出版されたダーリの『ロシア語詳解辞典』の第 2 版である。ここではインテリゲンツィヤは、「住民の理性と教養のある知的部分（разумная, образованная, умственно развитая часть жителей）」と定義されている[64]。

18 世紀の 60 年代、70 年代にうまれた教養ある貴族には、これまでの先行研究において様々な名称が与えられている。歴史家 V.O.クリュチェフスキー(1841-1911) は、「ヨーロッパ的教養をそなえたロシア人（русский европеец）」[65]と呼び、文化史家のミリュコフは「ロシアのインテリゲンツィヤの第一世代（первое поколение русской интеллигенции）」[66]と、文学者の G.A.グコフスキー（1902-50）は、「その時代の高いレベルの世界的文化を身につけた教養のある人々」「貴族の最も進歩的な層、より民主的な層」[67]としての「貴族知識人（дворянская интеллигенция）」[68]と呼んでいる。また、マラシノヴァは教養貴族を「文化人貴族（интеллектуальная аристократия）」[69] と呼んでいる。

本論文では「公衆」の中心としての貴族に焦点を当てており、しかも知識人自体は 19 世紀に本格的に出現することから、知識人という言葉は使用せず、貴族でなおかつ開明的な教養ある文化人という意味で「貴族文化人」を採用する。

そして、貴族文化人の特徴は、チューパが指摘するように[70]、18世紀ロシアの貴族の社会生活を支配していた「社会的役割意識」と「自己意識」の相関関係に見ることができる。彼らは読書や留学などを通じて様々な西欧文化を受容し、「自己意識」を獲得していた。しかし、彼らが「自己意識」よりも強く感じていたのが、貴族としての「社会的役割意識」であると考えられる。

また、貴族文化人が君主は国益を第一に考慮し、行動するとの考えを持ち、啓蒙君主としてのエカテリーナⅡ世に期待をかけていたことも特徴である。エカテリーナⅡ世治下で、.パーニン伯爵など穏健反対勢力の貴族文化人グループは国家統治における貴族の役割の拡大を求め活動していたし、急進反対勢力のノヴィコフなどは慈善活動や出版活動を通じて社会的貢献を実践していた。しかし、こういった進歩的貴族が持つ「社会的役割意識」が強くなればなるほど、君主であるエカテリーナⅡ世にとってはその意識は脅威となっていった。彼らの思想や文化活動が、エカテリーナⅡ世の監督の枠から逸脱する恐れがあったからである。

近代的自己意識と共に、貴族としての社会の中での役割意識を強く持っていた貴族文化人の代表として、とくに文芸・出版活動分野で活躍したノヴィコフ、フォンヴィージン、シチェルバートフ、ラジーシチェフ、クニャジニンなどを列挙することができる。

エカテリーナⅡ世の治下では、官等制度により貴族となった多くの文化人が生まれている。1794年に出版された『ロシア・アカデミー辞典』の第1巻に、エカテリーナⅡ世により1783年に設立された人文系のロシア・アカデミー[71]のメンバーリスト(1783年～1787年)が、入会年とその官位付きで所収されている[72]。これは当時、どのような人物がロシア・アカデミー会員として活躍したかを示す文書である。この文書とその他の伝記的資料と付き合わせることによって、非貴族階級出身者とアカデミー会員との繋がりを知ることができる。付属資料3を参照。

このロシア・アカデミー会員名簿から、1783年から1787年までの会員が宗教関係者15人、武官8人、宮内官4人、残りの35人が文官から構成されており、しかも全員が世襲貴族となっている。この中から非貴族階級出身で貴族となった文化人を特定することができる。例えば、印刷工の息子からモスクワ大学教授となり、その後優れた翻訳の功績で6等文官となり、世襲貴族となったA.A.バルソフ(1730-91)、8等文官となった町人出身の法律学者デスニツキー、貴族身分でない兵士の息子から7等文官となり、ロシア科学アカデミーの常任書記となった植物学者I.I.レピョーヒン（1740-1802)、同じく「兵士の息子」から7等文官のアカデミー教授となった医学者A.P.プロタソフ（1724-96)、堂務者（下級聖職者）の息子として生まれ6等文官となったロシア古典主義建築様式創設者で、芸術アカデミー副総裁、建築家バジェノフ、農村の聖職者の息子から科学アカデミー教授で6等文官となった天文学者S.Ya.ルモフスキー(1734-1812)、同じく7等文官となった自然科学者N.Ya.オゼレツコフスキー（1750-1827)、プレオブラジェンスキー連隊の「兵士の息子」からアカデミーの教授で、7等文官となった数学者S.K.コチェリニコフ(1723-1806)などである。

さらに、非貴族階級出身者としては科学アカデミーの教授で作家V.K.トレジアコフスキー（1703-69)、エカテリーナⅡ世の宮内官で作家コジツキー、モスクワ大学歴史学教授チェボタリョフ、7等文官になった作家M.D.チュルコフ（1743-92）などを挙げることができる[73]。また、非貴族階級出身の貴族文化人として、18紀ロシアの科学・文化の進展に大きな貢献を果たしたM.B.ロモノーソフ（1711-65）を忘れてはならない。

18世紀後半のロシア貴族は、少数者から構成された支配階級でもあり、複雑なヒエラルキーを持っていた。貴族階級は世襲貴族と一代貴族、称号のある貴族と称号のない貴族、500人以上の農奴を所有する大貴族と20人から100人以下の農奴を所有していた小貴族まで多様な階級構造を抱え

ていた。法律的に貴族と認められていても、生涯貧乏ではないという保証はなかったとされる。ロシア史研究者 I.マダリアガは、農奴の所有数を規準にして 1762 年当時の貴族の財産状況をまとめた表を発表している[74]。

表 10　貴族の財産状況

| 農奴数 | 地主の割合 |
|---|---|
| 20 人以下 | 51% |
| 21 人から 100 人 | 31% |
| 101 人から 500 人 | 15% |
| 501 人から 1000 人 | 2% |
| 1,000 人以上 | 1% |

「18 世紀中頃豊かな大貴族は貴族全体の 1%というほんの一握りでしかなかったし、82%の貴族が 100 人の農奴も所有していなかった。1770 年代当時男性の農奴一人は 2,5 ルーブルと評価されていた。したがって、貴族の 62%の収入は年間で 100 ルーブルも超えていなかった」と指摘されている。このように、貧しい貴族が貴族の中でも大多数を占める一方、数千人単位の農奴を所有していたシュヴァーロフ家、ラズモフスキー家、ヴォロンツォフ家などの上流貴族が存在していた。貴族の称号を持っていても、貴族内部の階級格差は、かなり大きなものがあった。

貴族のヒエラルキーを決める重要な要素は官位、出自の古さ、豊かさであり、それは貴族の社会的権威を極めて如実に表すバロメータだった。V.I.ブガノフと S.M.プレオブラジェンスキーの研究によると、「19 世紀初めにかけてロシア帝国の貴族全体の 44%が商人出身者であった」[75]とされるが、これは商人出身や雑階級出身の一代貴族が多かった事実を示している。18 世紀のロシア貴族について研究した A.ロマノフ=スラヴァチンスキーが「 法律的にも社会的にも規定されていない新しい社会階層が現れた。世襲貴族と納税階層との間の中間層である」[76]と指摘しているように、この新しい階層が一代貴族であった。世襲貴族と一代貴族との間の違いは、歴然としていた。体罰からの自由などの権利を一代貴族は持っていたが、世襲貴族が持っていた農奴を持つ権利などはなかった。法律的にも、社会的にも安定していないことは、一代貴族の道徳的発展にはよい影響を与えることはなかった。その反面、一代貴族のエリート層は貴族文化人として活躍している。

このような一様でない貴族社会の中で形成された貴族文化人グループは、書籍・雑誌の普及や西欧の社会理論の影響、教育の普及、「自由経済協会」[77]などの各種学術協会の活動、イギリスクラブなどの様々なクラブの活動、サロンの普及、宮廷舞踏会の開催、外国人との交流，劇場、フリーメーソンの活動などと密接に関わっている。

貴族文化人の数は、かつては世襲貴族出身者がほとんどであったため、限られていた。1760 年代から中小貴族出身の貴族文化人の数が増えている。この現象は、一面ではエカテリーナⅡ世の専制主義を支える貴族社会の強化につながり、別の面ではエカテリーナⅡ世時代の特徴として挙げられる貴族文化の担い手をつくりだすことになった。

貴族文化人の形成を最初に促進したのが、1762 年にピョートル III 世が公布した「貴族の自由についての布告」[78]である。この勅令によって、貴族は国家勤務から解放されることになり、地方の

領地に戻った貴族は地方に文化を広める役割を果たした。これにより、貴族は国家勤務の強制義務から解放された。この貴族解放令に対する貴族の反応は、大きく2つに分かれた。すでに軍事・行政で高いポストを占めていた名門貴族は従来通り国家勤務を続け、中下層の貴族は自分の所領地に戻るケースが多く見られた。その結果、地方にも知的生活を楽しむ貴族が住むこととなり、それは書籍が地方に浸透することを促進し、地方の知的生活レベルの向上につながった[79]。

さらに、エカテリーナⅡ世がおこなった1775年の地方行政改革と1785年の「貴族への恵与状」の公布も地方貴族を中心とした地方の発展に大きく寄与した。貴族の身分的な諸特権が確認されたことにより、官吏として勤務する貴族は地方の文化発展においても重要な役割を果たした。

アメリカの歴史学者M.ラエフも「絶対君主制の樹立とピョートル大帝の改革によって専制国家に依存した官僚層が生まれ、この官僚は君主と貴族の間に立っていた。だが、官僚の中でも最も開明された知的な部分は国家権力から離れ、別の活動分野で自己実現をしようと試みた。そういう状況が貴族文化人グループの形成を促進した」[80]と指摘している。このように、国家勤務から離れて地方で暮らす貴族と地方に赴任して官僚として勤務する官僚貴族の両者が、各地で貴族文化人グループを形成することになった。

エカテリーナⅡ世の時代、宮廷と貴族文化人を中心とした文化が広まった。その文化活動、とくに文芸活動の特徴は、風刺という表現様式を利用し、批判的傾向を強く持っていたことである。ミリュコフは、貴族文化の形成を「知的世論の歴史の始まり」と理解し、さらにその世論の基礎には批判要素があり、しかもその批判要素は君主にとっては「余分であるだけでなく、危険であった」と指摘している。そのため、貴族文化人を「批判的に思考する少数者」と表現している[81]。それは、貴族が国内の出来事に関して一様の態度をとっていたわけではないからである。

貴族文化人は、専制権力と追従にもとづいて作られた宮廷に対する批判勢力を形成することになった。そして、マラシノヴァが「こういった開明的な人達の重要な武器は言葉だった」[82]と主張しているように、貴族文化人は貴族に見られた追従、子弟教育の欠陥、無教養、悪徳、フランスかぶれ、奢侈、汚職などの問題をテーマとして、定期刊行物を通じて道徳的・風刺作品の中でとりあげ、批判活動を展開した。

その結果、18世紀の後半の多くの文芸作品には、貴族文化人の批判・風刺的傾向が強く反映されることになった。彼らは「社会的役割意識」の自覚のもとに、文化的・知的生活がもつ個人主義的で、自立的傾向をますます強めた。しかも、ノヴィコフら革新的な考えをもつ文化人の活躍する場所は、純粋に文芸分野に留まらなかった。彼らが雑誌を通じて政治・社会分野に活動を広げるようになったことで、エカテリーナⅡ世は出版統制政策の必要性を感じざるをえなかった。

### 1.3.2. 特徴

18世紀後半ロシアの知的生活は、急速に進展した。ロートマンが「18世紀の文化の内部対立は、多文化現象と結びついている。18 世紀のロシア文化は、記号論的多言語が特徴である」[83]と指摘しているように、ロシアの貴族文化人が中心となってつくりあげた文化の特徴は、多言語文化であり、しかもヨーロッパ文化とロシア文化との二層構造をつくりあげていたことである。このような状況をV.M.ジヴォフは、「ヨーロッパナイズされたエリートは、自分がヨーロッパに関わりを持っているという意識に満足することなく、『ヨーロッパ的教養を備えたロシア人』の概念を形成し始め、自らをロシア市民の最良の部分であるとみなし始めた」[84]と特徴づけている。貴族文化人は、自分

がロシア人であることのアイデンティティを強く感じるようになっている。

文化人として活躍する作家が、数多くいたわけではない。文学者のグコフスキーは、18 世紀の後半には「ロシアの知識人は数的にも質的にも成長」し、「当時の高いレベルの国際的教養を備えた文化人は、すでに数十人ではなく、数百人」[85]に達していたと述べる。その多くが貴族出身者であったことは明らかである。

1772 年にノヴィコフが発行した『ロシア作家に関する歴史辞典の試み』[86]の中でとり扱った当時の作家の人数が 350 人余となっていることから、その数は数百人の単位であったと考えられる。

小数の貴族文化人が読者層の中核をなし、印刷出版市場に積極的に進出し、出版者として作品を読者層に提供すると同時に、作家として作品を出版市場に発表していた。

その一方で、雑階級出身の文化人の数が、確実に増えていたことも忘れてはならない。

### 1.3.3. 知的活動の形態

ロシアの貴族文化人の知的活動は、啓蒙主義国の先達であるイギリス、フランスで文化人が集まり議論をおこなったサロンやコーヒーハウス、及び批評雑誌などの形態を踏襲している。

貴族文化人は国家勤務をしている者としていない者と二つのグループに分けることができ、いずれのグループも知的活動、主として文学活動に時間を費やし、独特の活動形態を見つけだした。第一の活動形態は、定期刊行物としての雑誌に参加することである。ロシアの新規刊行雑誌のタイトル数は 1751 年から 1760 年には 5 タイトルであったのが、1771 年から 1780 年は 18 タイトル、1781 年から 1790 年には 29 タイトル、1791 年から 1800 年には 20 タイトルの雑誌が発行され、その数は増えている。とくに、エカテリーナⅡ世が即位した 1762 年以降は、その前の 10 年間と比較すると、雑誌の新規発行数は、格段に増えている。例えば、エカテリーナⅡ世の治世初期においてヘラスコフは『有益な楽しみ(Полезное увеселение)』(1760-62) を、ボグダノーヴィチはダーシコヴァ公爵夫人の庇護のもと『無邪気な練習(Невинное упражнение)』(1763) を発行している。

1769 年にエカテリーナⅡ世がロシアで初めての風刺雑誌『一切合切』を発行したのに続いて、ノヴィコフ、F.A.エミン(1735-79)が次々と風刺雑誌を自ら編集者となって、官営印刷所に雑誌の印刷を依頼し、発行している。また、1783 年エカテリーナⅡ世が民間人に民営印刷所設立の許可を認めた結果、雑誌数が急激に増えている。貴族文化人は、増え続ける雑誌を中心に文芸批評活動をおこない、紙面上で政治問題を含めた様々な議論に参加した。次第に、彼ら自らが雑誌の発行者として、積極的に出版業にも参加し、印刷所つまり情報伝達手段を獲得するようになった。ノヴィコフが 1779 年にモスクワ大学の印刷所と 10 年間の賃貸契約を結んだことなどは、その例として挙げることができる。

第二の活動形態は、学術協会やクラブなどである。これらの組織は科学の成果を宣伝し、社会を啓蒙し、豊かにすることを目標としていた。学術協会として最初にロシアに現れたのが、1765 年に設立された「自由経済協会 (Вольное экономическое общество)」で、有力な上流貴族と学者などにより設立され、農業の振興を主として国内経済の進展を目指したものであった。1768 年にはエカテリーナⅡ世が科学アカデミー院長オルロフをトップに据え、『外国書籍翻訳促進協会(Общество, старающееся о переводе иностранных книг)』を設立した。この協会の実際の管理をおこなっていたのは、エカテリーナⅡ世付きの宮内官コジツキーであった。

この他に、1771 年にはモスクワ大学を基礎に詩や散文や翻訳作品を通じて、ロシア語を矯正し、

豊かにする目的で「モスクワ大学付属自由ロシア協会(Вольное Российское собрание при Московском университете)」[87]が設立されている。この協会は1771年から1783年までの間に作品集を6回発行しており、参加者にはヘラスコフ、フォンヴィージン、ダーシコヴァ公爵夫人、クニャジニン、デルジャーヴィンなどがいる。

1773年にはノヴィコフにより設立された「書籍印刷促進協会(Общество, старающееся о напечатании книг)」、機関誌『サンクト・ペテルブルグ通報(Санкт-Петербургский вестник)』[88]を刊行した1788年設立の「学術愛好協会(Общество любителей наук)」、さらに1779年設立の「友好学術協会(Дружеское ученое общество)」[89]、ラジーシチェフが参加した月間機関誌『対話する市民（Беседующий гражданин）』を刊行し、1784年に設立された「文学・語学友好協会(Общество друзей словесных наук)」[90]といった団体組織は、貴族文化人の文化活動の拠点となった。

こういった団体組織は作品集を発行したり、ロシアへ新しい学術理論を紹介したり、奨学金の支給などによる学生に対する支援をおこなうなど幅広い活動を展開した。

その他の会員制組織としては、フリーメーソンのロッジが存在している。1989年に刊行した『フリーメーソンと18世紀ロシアの公衆』において、スミスは「当時のロシア（最盛期1770年代から1780年代）においてフリーメーソンは、3,000人以上の会員と135のロッジを要していて、一説にはその約半数が国家官吏であった」[91]と記述している。また、ロシアにおけるフリーメーソン史を1996年に記したO.A.プラトーノフは、「1792年のモスクワ警視総監プロゾロフスキーによるエカテリーナⅡ世宛ての秘密報告によると、フリーメーソン員は約800人となっていたが、これはかなり少ない数字で、私達が計算すると1,500人から2,000人はいたと考えられる」[92]との意見を主張している。

いずれにしてもフリーメーソン員の数はかなりの人数に達している。このように、18世紀後半のロシアにおいて、フリーメーソン組織が大きく拡大した要因の一つは、サロンやクラブと並んでフリーメーソンのロッジが一種の社交場として機能したことにある。ロシアの哲学者N.A.ベルジャーエフ（1874-1948）は、「18世紀のロシア社会において、フリーメーソンは唯一の精神社会運動であり、その意義は大きいものがあった。最良のロシア人がフリーメーソン員だった。・・・フリーメーソンはロシアで最初の自由な自発的な組織であったし、フリーメーソンだけが上からの権力を押し付けられなかった」[93]とフリーメーソンを権力から自立した自由組織であったと記している。

また、歴史学者ラエフは「フリーメーソンのロッジや結社も大変な人気を博した。それは、社交生活に対する新しい枠組みを提供したからだが、それだけではなく深い社会的、精神的渇望を満たすことができたからでもあった」[94]と説明し、フリーメーソンのロッジが文化人の知的活動の根拠地になっていたことに言及している。

このようにフリーメーソンの組織は、自由な雰囲気の中で議論をたたかわす貴族文化人の社交場の役割を果たした。ヴェルナツキーは「イギリス系ロッジを中心とした合理主義的フリーメーソンも薔薇十字団を中心としたモスクワの神秘主義的フリーメーソンも、自分達の活動の目的を社会と国家を良くすること、社会福祉の向上に置いていた。そして、活動の中でとくに重視したのが内面の自己完成であり、道徳教育であった」[95]と述べている。これは当時の貴族文化人が、精神世界で欲していたものでもあった。

知的活動組織以外に、いわゆる親睦や娯楽のためのクラブなどが存在している。1770年代から1795年までに、例えばペテルブルグには7つのクラブがあり、慈善活動を活動目的としていたが、

実際にはトランプゲームなどの賭け事がおこなわれていたりしていた。ペテルブルグに最初に設立され、権威があった会員制クラブは 1770 年設立の「イギリスクラブ」で、ここにはイギリス人などの外国人の他に歴史家 I.N.ボルチン(1735-92)、ラジーシチェフ、エカテリーナⅡ世付の宮内官 A.V.フラポヴィツキー(1749-1801)も出入りした。また、名門貴族のゴリツィン家、ユスポフ家などもメンバーであったし、男性のみが会員になることが許された。1772 年にはドイツ人シュスターが設立した「シュスタークラブ（別名ドイツクラブ）」などが設立されているし、1783 年には、「アメリカクラブ」が設立されている。さらに、音楽クラブ、舞踏クラブなど商人などを含めて、上流貴族などが出入りした様々なクラブが形成されている[96]。こうしたクラブは、一種の社交場の役割を担った。

このような各種組織において貴族文化人は活動をおこない、意見を交換し、議論する「公衆」の中核の役割を果たすようになった。こういった様々な文化人の独自の活動形態は、ヨーロッパ的教養をそなえた文化人「読者層」を、この時点ではまだ萌芽状態の「公衆」を作り上げようという試みにつながったと考えられる。そして、彼らの啓蒙活動は出版活動と結びつくことになり、自ら印刷所を設立し、賃借することで直接出版活動に進出し、雑誌、書籍などを通じて貴族社会中心の「世論」を作り出すことになる。

## 1.4. エカテリーナⅡ世と貴族文化人の啓蒙活動の目標

エカテリーナⅡ世が支配する専制国家権力の啓蒙政策の目標は、教育によって、開明された「新しい種類の人間」を作り出し、国家イデオロギーとして「祖国」と「君主」に忠誠をちかう臣民を帝位の周りに集めることだった。1783 年にエカテリーナⅡ世は啓蒙政策のひとつとして、国民学校設立委員会を設置、国民学校の教科書の副読本として『人間と市民の義務について（О должностях человека и гражданина）』[97]の策定を命じている。この書物は、若者に法と権力への尊敬の念の気持ちを抱かせる目的で書かれており、国家と君主に対する模範的恭順の思想で貫かれている。さらに、法を遵守し、階層に関係なく君主に忠誠を誓う者のみが愛国者であり、エカテリーナⅡ世の教育理念である「祖国の真の息子」とみなすことができると記されている。

祖国の息子であるためには、1）政府に対して非難に値することを何もしないこと、 2）法に服従すること、3）政府の洞察力と正義に対して信頼することであると記されている[98]。このエカテリーナⅡ世の原則は、同じく 1783 年に雑誌『ロシア語愛好者の友』の第 3 号に掲載された穏健批判勢力のフォンヴィージンの作品『賢明な誠実な人々の特別の注意を呼び起こすいくつかの質問』[99]の回答に見ることができる。第 20 番目の「私達の民族的な特質は何でしょうか？」の質問に対してエカテリーナⅡ世は、「全てのことを素早く、明確に理解することであり、申し分のない従順であり、その根本にあるのは創造主が人間に与えられた徳性です」と答え、徳性を持ち、君主に従順に仕えることがロシア人の民族的特質であると答えている。

このように、君主に強い忠誠心をもち、「祖国」、すなわち君主に最大の益をもたらすことができる人間を作り出すことが、エカテリーナⅡ世が目指す教育目的であり、啓蒙政策の目標であったことが明確に打ち出されている。

また、『人間と市民の義務について』には、「臣民（подданный）」の概念が定義されている。「臣民とは国家に属する全ての人を指し、君主もしくは支配者に服従する人のことである。臣民は、様々

な階層からなり、高貴な身分の臣民と低い身分の臣民があり、低い身分の臣民の中にいわゆる自由な人がいて、彼らは主人の許可なしで住んでいる場所から移動できる。・・・国家の高貴な身分の臣民は、その所領や啓蒙レベルや能力などによって他者と非常に異なっている。彼らは高い身分だけでなく、国家勤務の面においても優れている」[100]と記述されている。このように、エカテリーナⅡ世が考えた君主に忠誠をちかう臣民の社会構成はとても単純なもので、上流階層と下流階層から構成され、下流階層の中の自由な人々のグループに第三身分となる都市住民と商人が含まれていた。

エカテリーナⅡ世が啓蒙事業をおこなうことによって育てる開明的な人間とは、祖国と君主に模範的に服従する「臣民」であり、「市民」ではなかった。同じ1783年にフォンヴィージンは、作品『必要不可欠な国家法についての考察』において、「臣民の幸福を実現するため、最高権力は君主にまかせられる」と文章を始めながらも、「専制のあるところには最高の法律も、固い絆もありえない。つまり、そこには国家はあっても祖国はなく、臣民はいても市民はいないし、メンバーが相互の権利と義務によって結ばれるような政治体制もない」とし、「法律のない国家には臣民はいても、市民はいない」[101]とエカテリーナⅡ世の専制政治体制を厳しく批判している。

エカテリーナⅡ世は、下層階級でも、自由を享受している人々は将来的に帝位にとって、「真の臣民」や「有用な良い教育をうけた市民」になれると主張している。だが、実際にエカテリーナⅡ世が目指していたのはあくまでも「貴族階級と農奴」から構成される社会だった。エカテリーナⅡ世にとっての公式イデオロギーは、「祖国」と同じ意味を持つ「君主」への忠誠であった。

一方、貴族文化人が考えた教育によって啓蒙された人間とは、「祖国」に有用な、高い精神性と徳性と思考の気高さを持ち、祖国愛に満ち溢れた人間であった。エカテリーナⅡ世が考える公式イデオロギーとしての祖国、すなわち君主への忠誠、そして祖国愛および個人の尊厳を尊重する貴族文化人が考える祖国の概念は明らかに違っていた。そのため18世紀末にかけて進歩的教養人貴族とエカテリーナⅡ世との関係は、複雑なものになった。

しかも、18世紀最後の四半世紀のロシア社会には、貴族文化人グループには穏健派と急進派の二つの大きな潮流があった。穏健派とはパーニン伯爵兄弟、フォンヴィージン、ダーシコヴァなどで制限君主制を唱え、国家勤務を続けていたグループであった。彼らの考えは、君主は法の創造者であり、国家全体の益と善のために国家統治をおこなうべきというものだった。他方、ノヴィコフ、ラジーシチェフなどの急進派も同じく君主も法に従うべきであると考え、とくに自由の問題と農奴問題などの解決を重要視した。だが、この両派に共通する特徴がある。それは、両派ともエカテリーナⅡ世がより優れた開明君主であるはずだと期待をかけていたことであり、貴族の役割の強化を主張している点である。たとえ啓蒙事業の最終目標は異なっていても、ロシア社会の近代化を目指してエカテリーナⅡ世も貴族文化人も上からの啓蒙活動を積極的に推進した。

『ロシア・アカデミー辞典』では、「啓蒙」を表すロシア語の «просвещение» の意味の一つは、教導し、無知蒙昧に対抗することとされる。18世紀のロシアにおける啓蒙運動は、先生が生徒を教え導き、生徒の理性を浄化することであり、上からの啓蒙事業であった。教え導くエカテリーナⅡ世の啓蒙政策の主要な方針は、国民学校を中心とした公教育制度を充実させ、文芸・出版活動を奨励・保護し、近代社会の基礎となる新しい人間をつくること、それは公に自らの意見を表明でき、他者に影響を与えることができる人間だった。「啓蒙」という言葉を最初に使ったのは、哲学者カント(1724-1804)とされる。彼は、1784年に記した『啓蒙とは何か』の中で「啓蒙とは何か。それは人間が自ら招いた未青年の状態から抜け出ることだ。未青年の状態とは、他人の指示を仰がなければ自分の理性を使うことができないということである」[102]とし、そのスローガンは自らの理性を

用いる勇気をもてとし、自立的に思考する能力を獲得する努力をすることだと述べている。さらに、「自分の思想を公に伝達する自由を人々から奪い取るような外的権力は、考える自由というあらゆる禍悪に対してなお対策を講じえるような唯一の宝石をさえ奪い取るであろう」[103]と述べる。このように、「思考する自由」は「思考を公共的に伝える自由」と密接な関係をもち、そして、その関係に権力が関与してくるのである。

ノヴィコフを初めとする貴族文化人や商人は、情報伝達手段である印刷所を設立し、出版・編集者として独自に活躍するようになった。しかも、貴族文化人は問題提起の場として、定期刊行物である道徳雑誌を積極的に活用した。道徳雑誌は、次第に批判的な議論の場と変化していった。文化人は、政治の場に踏み込んで行った。しかも、エカテリーナⅡ世の治世末期には、フランス革命を初めとした外国からの多大な影響が出版物を通じてロシア社会にもたらされている。こういった事態が、貴族文化人とエカテリーナⅡ世との間に対立を呼び起こす原因となり、エカテリーナⅡ世は印刷所を管理する必要性を次第に強く認識するようになった。そして、エカテリーナⅡ世は出版統制という形で、これまでは君主の独占の場であった政治の舞台に批判勢力が現れることを阻止し、その行動を抑制する措置を講じざるをえなくなったのである。

---

[1] Yハーバマス『公共性の構造転換』細谷貞雄訳、未来社、1973年、成瀬治「市民的公共性」の理念『社会的結合』岩波書店、1989年、283-307頁。
[2] Милюков П.Н. Очерки по истории русской культуры. М., 1896 - 1903. // 1995. Т.III. С.255-338.
[3] Gerta Huttl Worth. Foreign Words in Russian. University of California Press Berkeley an Los Angeles. 1963. P.100.
[4] Douglas Smith. Freemasonry and the Public in Eighteenth century Russia・Imperial Russia. Indiana University Press. 1999. P.55.
[5] Ibid. P.58.
[6] Словарь Академии Российской. 1789 - 94. Т.1- 5. М., // 2001-2005. Т.4. С.599.
[7] Даль В.И. Толковый словарь живого великорусского языка. М.,Т.3. 1882. // 1955. С.535.
[8] Smith. Op. cit. P.54.
[9] Екатерина II. Сочинения. СПб., 1903. Т.V. С.281.
[10] Сатирические журналы Н.И.Новикова. М.-Л., 1951. С.68.
[11] Фонвизин Д.И. Избранное. М., 1983. С.172- 204.
[12] Там же. С.186.
[13] Там же. С.172.
[14] Smith. Op. cit. P.59.
[15] Кабузан В.М. Изменение в размещениях населения России в XVIII - первой половине XX в. М., 1971. С.59-117.
[16] Кабузан В.М. Население российской империи в XVIII веке. http://www.auditorium.ru/books/756/gl3.pdf 最終確認日 2009年8月25日
[17] Милюков. Указ. соч. С.338.
[18] Там же.
[19] Сводный каталог русской книги гражданской печати XVIII века.1725-1800. М., 1962-1975.
[20] Marker G. Publishing, Printing and the Origins of Intellectual Life in Russian 1700-1800. Princeton University Press. 1985. P.72.106.
[21] Севастьянов А.Н. Рост образованной аудитории как фактор развития книжного и журнального дела в России (1762- 1800). М., 1983. С.23.
[22] Marker. Op. cit. P.167.
[23] Самарин А.Ю. Читатель в России во второй половине XVIII века. М., 2000. С.13-14.
[24] Там же. С.205.
[25] Там же. С.207.
[26] 雑誌『モスクワ・ジャーナル』はカラムジンによって1791年に発行され1792年に廃刊された雑誌で、ほとんどの作品は匿名で掲載された。カラムジンの他にデルジャーヴィン、カプニストなどの作家が参加している。ロシアで初めて演劇批評と書評が出現した雑誌である。1801年から1802年にかけて第2版が出版されている。
[27] Болотов А.Т. Жизнь и приключения Андрея Болотова, описанные самим им для своих потомков. 1738-1795. СПб., 1873. С.845-846.

[28] Сапунов Б.В. Из истории русского читателя периода феодализма. // История русского читателя. Вып.IV. Л.,1982. С.28-29.
[29] Севастьянов. Указ. соч. С.16-18.
[30] Там же. С.31.
[31] 雑誌『画家』は1772年から1773年にかけてノヴィコフにより発行され、科学アカデミー印刷所で出版された風刺雑誌で、第1号の出版部数は636部であった。
[32] Marker. Op. cit. P.97.
[33] 雑誌『有益と娯楽のための毎月の作品』は1755年から1764年まで科学アカデミーにより発行され、最初の編集者としてG.F.ミュラーが任命された。歴史作品など学術作品の他に、詩や翻訳作品が掲載された。第1号の印刷部数は2000部とされるが、実際に1758年から1763年まで書店に入った部数は1250部とされる。
[34] 雑誌『雄蜂』は1769年から1770年にかけて科学アカデミー印刷所で印刷された雑誌で、第1号の印刷部数は626部であった。その後1769年末には1240部まで増えたが、1770年には750部まで減少した。
[35] 『モスクワ報知』は1756年から1917年までモスクワで発行されていた新聞で、1842年までは週2回発行されていた。1779年から1789年まで新聞を編集・発行していたのは、モスクワ大学印刷所を賃借していたノヴィコフであった。
[36] Севастьянов. Указ. соч. С.30-31.
[37] Лотман Ю.М. Очерки русской культуры XVIII- начала XIX века // Из истории русской культуры. Т. IV. М., 1996. С.107.
[38] Порой-Кошиц И. История русского дворянства от IX до конца XVIII века. СПб., 1900. // М., 2003. С.309-311.
[39] Самарин. Указ. соч. С.133.
[40] Севастьянов. Указ. соч. С.10.
[41] Там же. С.11.
[42] Самарин. Указ. соч. С.135-136.
[43] Y.M.ロートマン『ロシア貴族』桑野隆・望月哲男・渡辺雅司訳、筑摩書房、1997年、62-63頁。
[44] Самарин. Указ. соч. С.148.
[45] Там же. С.149.
[46] Там же. С.139-145.
[47] Там же. С.157-162.
[48] 各県にある宗教セミナリアや教会学校など。
[49] 各県の刑事院、民事院、市参事会、郡裁判所など。
[50] 各県にある税務庁など。
[51] 各県の国民学校、海軍幼年学校、モスクワ大学など。
[52] モスクワ・イギリスクラブ、プスコフ貴族クラブ、モスクワ貴族銀行など。
[53] 社会保護組織とは学校、病院、養護施設などを管理する機関で、具体的にはノヴゴロド社会保護官署など。
[54] 宗務院、宗務院モスクワ事務所、ヴォログダ宗務局など。
[55] 科学アカデミー、芸術アカデミー、外務参議会公文書館、自由ロシア協会、自由経済協会など。
[56] ペルミ鉱山管理局、アゾフ県絹生産工場管理局など。
[57] コストロマ都市住民協会、ネルチンスク町人協会、サンクト・ペテルブルグ商人協会など。
[58] 雑誌『一切合切』は科学アカデミー印刷所から秘書官コジツキーが発行人となり、1769年から1770年まで発行された雑誌で、エカテリーナⅡ世が直接関与していたとされる。
[59] Марасинова Е.Н. Психология элиты российского дворянства последней трети XVIII века. М., 1999. С.169.
[60] Фонвизин Д.И. Рассуждение о непременных государственных законах. // Избранное. М., 1983. С.231-242.
[61] Лотман. Указ. соч. С.84..
[62] 藤沼貴『近代ロシア文学の原点ニコライ・カラムジン研究』れんが書房新社、1997年、78-88頁。
[63] Собеседник любителей российского слова. СПб., 1783-1809.(マイクロフィッシュ), Неустроев А.Н. Историческое розыскание о русских повременных изданиях и сборниках за 1703-1802 гг. СПб., 1877., Добролюбов Н.А. Собрание сочинений. Т.1. М.-Л., 1961. С.182-279., Кочеткова Н.Д., Е.Р.Дашкова и «Собеседник любителей российского слова». // Екатерина Романовна Дашкова Исследования и материалы. СПб., 1996. Т.VIII. С.140-146., Кочеткова Н.Д. «Любослов» -сотрудник «Собеседник любителей российского слова». // XVIII век. М.-Л., 1962., Эйдельман Н.Я. Восемнадцатое столетие в изданиях вольной русской типографии. Россия XVIII столетия в изданиях Вольной русской типографии А.И.Герцена и Н.П.Огарева. Справочный том. М., 1992. С.155-282.
[64] Соколов А.В. Интеллигенты и интеллектуалы в российской истории. СПб., 2007. С.15.
[65] Ключевский В.О. Речь, произнесенная на торжественном собрании Московского университета 6 июня

1880 г. В день открытия памятника Пушкину. // Ключевский В.О. Исторические портреты. Деятели исторической мысли. С.395.
66 Милюков. Указ. соч. С.337.
67 Гуковский Г.А. Русская литература XVIII века. М., 1939. С.213.
68 Там же. С.268.
69 Марасинова. Указ. соч. С.22.
70 Тюпа В.И. Парадоксы уединенного сознания - ключ к русской классической литературе. // Парадоксы русской литературы. СПб., 2001. С.174-192.
71 ロシア・アカデミーは1783年にロシア語を豊かにすることを目的にエカテリーナⅡ世により設立された人文系のアカデミーで、ロシア語の辞書と文法を策定することを主たる活動とした。初代総裁は、当時科学アカデミー院長のダーシコヴァ公爵夫人が兼任した。その後1841年にロシア・アカデミーは、科学アカデミーの一部となる。
72 Господа члены российскую академию составляющие по старшинству их вступления. Словарь Академии российской 1789-1794. Т.1. М., 2001. С.59-60.
73 非貴族階級から貴族の称号を得た文化人については、次の資料を参照して調べている。Штранге М.М. Демократическая интеллигенция России в XVIII веке. М., 1965. С.276-295., Русский биографический словарь. М..- СПб., 1896-1918., Брокгауз Ф.А., Ефрон И.А. Энциклопедический словарь. СПб., 1890-1907.
74 Исабель де Мадариага. Россия в эпоху Екатерины Великой. М., 2002. С.139-140.
75 Буганов В.И. Преображенский С.М. Тихонов Ю.А. Эволюция феодализма в России. М., 1980. С.247-248.
76 Романов-Славатинский А. Дворянство в России от начала XVIII века до отмены крепостного права. СПб., 1870. // М., 2003. С.200.
77 自由経済協会は1765年に農業の発展と経済発展を促進する目的で上流貴族と学者によって設立され、論文集などを発行、その初期には農奴制についての論文集も発行した。
78 貴族の解放令として知られているこの布告は貴族の国家勤務の義務を完全に撤廃した点において画期的なもので勤務が強制から自由意志となった。この布告の重要な原則は、勤務は継続できること、貴族の子弟に対して有益な知識をさずけるために教育を受けさせるとしたことである。
79田中陽児・倉持俊一・和田春樹『世界歴史体系　ロシア史2－18～19世紀』山川出版社、1994年、69-70頁。
80 Raef M. Origins of the Russian Intelligentsia The Eighteenth-Century Nobility. P86-87. 140. 147.
81 Милюков. Указ. соч. С.252-253.
82 Марасинова. Указ. соч. С.17.
83 Лотман Ю.М. Успенский Б.А. К семиотической типологии русской культуры XVIII века. // Из истории русской культуры. Т.IV. М., 1996. С.425-447.
84 Живов В.М. Язык и культура в России XVIII века. М., 1996. С.268.
85 Гуковский. Указ. соч. С.213.
86 Новиков Н.И. Опыт исторического словаря о российских писателях. СПб., 1772.
87 モスクワ大学自由ロシア協会は1771年にモスクワ大学のもとに設立され、目的は詩や散文を通じてロシア語を改良し、豊かにすることである。会員はモスクワ大学の教授、文学者、社会活動家などであった。
88 『サンクト・ペテルブルグ通報』は1778年から1781年まで発行された雑誌で、主として勅令、元老院令などを掲載し、その他に新刊情報、外国情報などを掲載した。予約購読者部数は約200部数であった。
89 友好学術協会は、シュワルツとノヴィコフによって1779年に設立され、有用な書籍の出版、貧者用の薬局、学校などの設立慈善活動をおこなったが、1791年に閉鎖された。
90 月刊誌『対話する市民』はロシア語の詩や作品、外国作家の翻訳作品などを掲載し、1789年から1790年まで発行され、発行部数は約200部ほどであった。最終号にラジーシチェフの作品「真の祖国の息子とは何かについての対話」が匿名で掲載された。文学・語学友好協会は1784年にM.I.アントノフスキーが中心となって設立され、1790年まで活動した。
91 Smith. Op. cit. P.281-304.
92 Платонов О.А. Терновый венец России. Тайная история масонства 1731-1996. М., 1996. С.51.
93 Бердяев Н.А. Русская идея. М., 2000. С.17.
94 マルク・ラエフ『ロシア史を読む』石井規衛訳、名古屋大学出版会、2002年、109頁。
95 Вернадский Г.В. Русское масонство в царствование Екатерины II. СПб., 1917. // 1999. С.228-235.
96 Пыляев М.И. Старый Петербург. 1887. // М., 1997. С.216-221.
97 О должностях человека и гражданина. Книга к чтению определенная в народных городских училищах Российской Империи. СПб., 1783. Изд.2. この副読本は、オーストリアのFelbiger(1724-78)の著作をドイツ語からロシア語に翻訳し、エカテリーナⅡ世の参加の下に編集したもので1788年から1817年まで発行され、11版を重ねた。
98 Кондакова Н. Патриотизм. // Государственная служба. №2(28). М., 2004.
99 Фонвизин. Указ. соч. С.215-218.

[100] Марасинова Е.Н. К истории политического языка в России XVIII века. // Отечественная история. №5. М., 2005. С.8.
[101] Фонвизин. Указ. соч. С.231.
[102] カント『啓蒙とは何か』中山元訳、光文社、2006年、110頁。
[103] カント『思考の方向を定めるとは何か』門脇卓爾訳、理想社、1966年、25頁。